

常なる磐

つねなる いわ

令和3年2月5日(金)

その2

◇ 【検討中】 来年度のクラブ活動に関わる対応について

月曜日の日課。下学年はそうでもないが、上学年は本当に慌ただしく、忙しい。だから、本当によくやっている。

委員会活動が設定されているときは、特に甚だしい。

5限授業の後、クラブ活動、委員会活動、そして休む間もなく鼓笛練習へと移る。6限のクラブ活動は、移動や準備、片付け、着替えも加わる場合もあるのでなかなか大変だ。しかも、週の始まりの月曜日。子供たちも、教員も、本当によく頑張っている。

けれども、全て重要な活動で、何かを取り除くわけにはいかないのだ。

知恵を絞り、「外せない活動価値ありき」という見方で活動を残していくと、クラブ活動のみ手が入らなかった。

このクラブ活動。文部科学省告示の学習指導要領で分けると、学級活動や児童会活動（委員会活動）と同様に特別活動に属する。よって、制約が極めて少なく、学校の自由度が高い。さらに、学習指導要領で示すクラブ活動の目標は、「異年齢交流による集団活動を通じた資質・能力の向上」をねらいとしている。

そこで考えたのが、クラブ活動の持ち方の変更である。

現在行っている鼓笛活動こそ、異年齢交流の極み。しかも、以前に校長だよりで伝えた（裏面に再掲載）ように、鼓笛活動こそ、学習指導要領が示す「クラブ活動の目的」を満たしているのだ。しかも、学んだことを発表する機会もある。

現在は、教員が講座を設け、子供たちが講座を選択する形式をとっているが、この方式を変えることを検討している。

【鼓笛クラブ】に一本化することで、鼓笛練習・技術習得の時間をこれまで以上に確保できるとともに、質を高められると考えた。加えて、子供たちの自己肯定感や充実感、達成感も高められると考える。

もちろん裏面で再掲載したように、「受け渡す」思いも大きくなるに違いない。

◇ 受け継ぐ ということ 受け渡す ということ より抜粋

(前略)

記念式典以降、昼放課は校歌演奏の練習がずっと続いている。大したものだ。褒め、讃えることができる部分は、継続して行っていることのほかにある。それは、練習に取り組む5・6年生の姿勢。まさに、姿から真剣味が伝わってくる。寄り添い、手取り足取り、自分が備えた技を伝授する6年生。そのエネルギーを真正面から受け止め、自分のものにしようと努める5年生。真剣勝負である。

6年生のエネルギーは、自分が演奏に注ぎ込んできたエネルギーだけではない。今、中学校に通う中1の先輩から授けてもらったエネルギーが加わっている。教えてもらったことを教えていく。伝えてもらったことを伝えていく。本校が長い年月をかけて醸成してきた伝統がそこにあるのだ。

5年生に伝わり、5年生が受け止めることができるのには理由がある。1年に及ぶ合同練習を通し、6年生が鼓笛演奏にかけてきた情熱の熱量を感じ、知っているからである。受け継がれてきたものを「受け継ぐ」責任がそうさせるのだ。これも伝統だ。だから、教員は付きっ切りでなくてよい。見守ればよい。なぜなら、そこに子供たちの【自主】が存在するからである。

タイトルには、敢えて「引き渡す」ではなく、【受け渡す】と書いた。「引き渡す」というのは、自分の手元にあるものを、ただ相手に「渡す」行為。「受け渡す」のと、全く意味を異にする。「受け渡す」とは、相手に「渡す」だけでなく、相手からも何かを「受け取る」ことを意味する。

6年生は技を伝え、思いを託すだけでなく、5年生からもらっているものがあることを忘れてはいけない。6年生の思いに応える【5年生の思い】である。

5年生に渡しているようで、実は5年生からいただいている。その時はよく分からないが、あとになってよく分かる。でも、それでいい。

授ける(さずける)という字に【受(ける)】があるのは、そういうことだと思う。

(後略)